

## 虫 笛

## 近くにあった「虫供養碑」

虫笛とは歌舞伎で、虫などの声を表す擬音用の笛のことである。今回は擬音でなく、実際に鳴く虫の話、それもその虫たちの供養碑のことをまとめてみた。

虫供養もしくは蟲供養の碑は全国にたくさん知られている。有名な供養碑は古くは福井県の小浜市の虫塚(1836年)が知られているが、他にも長崎県や佐賀県の虫供養塔、新しくは茨城県の蟲塚などが有名である。その供養の目的は農業害虫の供養、ヘビなども含めた「虫」の供養、そして商業としての虫の供養に大きく分かれる。私の住む長生村にも村の指定文化財にもなっている供養碑がある。ここに見られる供養碑は商業としての鳴く虫の供養碑にあたる。私はこの地へ引越し、最近この存在を知った。

さて、虫供養碑に知見のある読者はすでにご存知のこととは思いますが、私は不勉強でありその由来を知らなかったので、この機会に身近なこの供養碑について調べてみた。

まず江戸時代、「虫聴」という道楽があり、その虫を捕獲した業者がここ長生村岩沼(旧八積村岩村)に多く、江戸～大正時代まで生計を立てていた。特にこの地では文化12(1815)年、佐瀬半兵

衛が虫の繁殖に成功し、幕末には川城福松なる人物が鳴く虫を捕らえて江戸に売り込んで虫売り業を盛んにしたらしい。特に人工飼育(アブリという)で育てた虫は業者間では高価に取引されていた。ここでは成虫を東京下町の本所・深川・墨田向島・早稲田等の問屋に卸しており、昭和の初期までは上りの一番列車は虫を運ぶ虫売りの人たちで賑わい、車内は虫の鳴き声で情緒豊かであった。また、この地で採れるメダケを材料に40軒あまりの農家が副業で虫籠を作っており、なかでも岩沼の佐瀬六兵衛という虫籠作りの名人が作った虫籠を「六兵衛」と呼んだ。このように長生村(八積村)の昆虫は当時の一大産業であった。

ここに虫供養碑が建てられたのは大正後期、虫売りに翳りが見えてきた。この時代になると活動写真や蓄音機の普及、ラジオ放送の開始など、耳目を楽しむハイカラな媒体が登場したためである。虫売りの衰退を嘆き悲しんだ佐瀬吉松らが、百虫の霊を慰めるため、大正12(1923)年、村や東京の有志を募って石碑を建てた。虫供養塔は各地に見られるが、高さ185cm幅75cmと大きく、碑文で謡曲松虫に言及しているのは珍しいという。なお、この地ではスズムシ、マツムシ、キ



写真1 虫供養碑とその看板(文面では佐瀬吉松となっているが、吉松の誤り)



写真2 当時から作られていた虫籠

リギリスなどが多く捕獲されていたようで、つい最近まで農家のおばさんたちが借り出され、キリギリスを捕獲していることを聞いている（私の妻の母も捕っていた）。今でもこの周囲では、野生のスズムシやマツムシたちが秋の夜長を虫の音で楽しませてくれていることはありがたい。現代ではこのような鳴く虫でなく、カブトムシ、クワガタムシのように見て楽しむ虫が流行っているが虫産業としては成り立っている。

われわれの業界でも虫供養や鼠供養を行う企業や団体も多数あるが、この石碑と同じように「虫」で食べさせてもらっていることは同じである。虫をただ殺すだけではなく、食べさせてもらって

る供養の気持ちを忘れてはならないと思う。もし、これを読んだ読者の皆様の近くでも、このような供養碑があるかもしれない。是非探してその由来を調べ「虫笛」投稿してみたいはいかがだろうか。かつて鳴く虫だけでなく、養蚕が盛んであったわが国の産業が衰退していくように、私たちの業界の衰退が無いことをこの碑に願いを込めシャッターを切った（写真）。

場所：千葉県長生郡長生村岩村 1059-1, 外房線  
八積駅下車徒歩5分, 料金無料Pなし

問合せ：長生村生涯学習課 TEL 0475-32-5100  
(虫籠の展示物あり)

(イカリ消毒株式会社 谷川 力)